



明石市立  
文化博物館

# 文化博物館だより 第188号

2007年9月17日

みなさん、こんにちは。今日は3連休三日目、敬老の日です。みなさんはどんなご予約をお立てですか？今日の博物館だよりは先日開催されました講演会の内容をご報告いたします。

## ● 中国陶磁を超えた三田焼と珉平焼

9月16日(日)特別講演会が開催され、森村健一氏から『三田焼と珉平焼に見る中国陶磁』についてご講演いただきました。三田焼や珉平焼の生産が始まったのは18世紀末から19世紀始め。鎖国の中で、人々は中国の文化を求めており、その需要に応じて三田・珉平は中国陶磁の写しを作り始めましたが、それは中国陶磁よりも優れた出来栄えだったそうです。

三田は景德鎮の青磁、珉平は漳州窯<sup>しょうしゅうよう</sup>の写しを専門にしていました。それにはまず現物がなければなりません。漳州窯の全盛期は1580～1600年代。珉平焼が始まった時より200年前です。三田の手本とした青磁は12～15世紀のもの。手本としてその時代の優品が必要ですが、三田には篠山藩、珉平には徳島藩という現物を所有できる存在がありました。そして現物を見ながらデザイン帳を作りますが、これはただ中国陶磁を精密に模写するだけでなく、日本人の好み、生活様式を反映させることが重要です。そして高い技術。その三つが揃った三田と珉平だからこそ、全国に人気を博すものができたのです。

18世紀末から19世紀始めにかけては、三田・珉平以外にも各地でやきものの生産が始まりました。それは偶然ではなく、文化文政の時代に幕府が財政逼迫し、各地に特産品を作らせて自主財源をもたせるといった政策が背景にありました。王地山や東山等、兵庫県にも多くのやきものの産地がありますが、全国に流通した高級品から日常雑器まで、各産地が用途や流通を棲み分けることで、共栄共存を図ったのです。



三田焼 青磁亀形筆洗



珉平焼 三彩小皿

やきものを通して、日本の政治や流通にお話は広がりました。国の財政逼迫と、地方活性化。まさに現代の日本の政治経済に通じるテーマでした。歴史は繰り返される、歴史から学ばなければならないことはたくさんあると感じました。